

郊外

国木田独歩

青空文庫

時田^{ときだ}先生、名は立派なれど村^{そんりつ}小学校の教員である、それも四角な顔の、太い眉^{まゆ}の、大きい口の、骨格のたくましい、背^{せい}の低い、言うまでもなく若い女などにはあまり好かれ
ない方の男。

そのくせ生徒にも父兄にも村長にもきわめて評判のよいのは、どこか言うに言われぬ優しいところがあるので、口数の少ない代わりには嘘^{うそ}を言うことのできない性分、それは目でわかる、いつも笑みを含んでいるので。

嫁^{むめ}を世話をしよう一人^{ひとり}いいのがあると勧めた者は村長ばかりではない、しかしまじめな挨拶^{あいさつ}をしたことなく、今年三十一で下宿住まい、このごろは人もこれを怪しまないほどになった。

梅^{むめ}ちゃん、先生の下宿はこの娘のいる家^{うち}の、別室^{はなれ}の中二階^{ちゅうう}である。下は物置で、土間^{どま}からすぐ梯子^{はしご}段^{だん}が付いている、八畳一間^{はつじょういっけん}ぎり、食事は運んで上げましよというのを、それには及ばないと、母屋^{おもや}に食べに行く、大概是みんなと一^{いっしょ}同に膳^{ぜん}を並べて食うので、何を

食べささりようと頼着とんちやくしない。

梅ちゃんは十歳とおの年から世話になつたが、卒業しないで退校ひいしても先生別に止めもしなかつた、今は弟の時坊が尋常二年で、先生の厄介になつている、宅うちへ帰ると甘えてしかたがないが学校では畏おそれている。

先生の中二階からはその屋根が少しばかりしか見えないが音はよく聞こえる水車すいしや、そこに幸ちゃんという息子むすこがある、これも先生の厄介になつた一人で、卒業してから先生の宅うちへ夜分やぶん外史を習いに来たが今はよして水車の方を働いている、もつとも水車といつても都の近在だけに山国の小さな小屋とは一つにならない。月に十四、五両も上がる白うすが幾個いくつとかあつて米を運ぶ車を曳ひく馬の六、七頭も飼つてある。たいしたものだと梅ちゃんの母親などはしよつちゆううらやんでいるくらいで。

『そんならこちらでも水車をやったらどうだろう、』と先生に似合わないことをある時まじめで言いました。

『幸ちゃんこうとこのようにですか、だつてあれは株ですものう、水車がそういつだつてできるもんならたれだつてやりますわ。』おかみさんは情けなそうに笑つて言った。

『なるほど場処がないからねエ。』先生はまじめに感心してそれで水車の話はやんで幸ち

やんのうわさに移った。

お神かみさんはしきりと幸ちやんをほめて、実はこれは毎度のことであるが、そして今度の継母まはははどうやら人が悪そうだからきつと、幸ちやんにはつらく当たるだろうと言った。

『いい歳としをしてもう今度で三度めですよ、第一小供こどもがかあいそうでした。』

『三度め！』先生は二度めとばかり思っていたのである。

『もつとも幸ちやんの母親おふくろは亡なくなつたんですけれども。』

この時、のそり挨拶あいさつなしに土間に現われたのが二十四、五の、小づくりな色の浅ぐろい、目元の優しい男。

『オヤ幸ちやんが！ 今お前さんのうわさをしていたのよ。』実はお神さん少し驚いてまごついたのである。

『先生今日は。』

『この二、三日見えないようであつたね。』

『相変わらず忙しいもんですから。』

『マアお上ごんがんなさいな、今日こんにちはどちらへ。』お神さんは幸吉こうきちの衣装なりに目をつけて言った。

『神田の叔父の処へちよつと行つて来ました、先生今晚お宅でしょうか。』幸吉の言葉は何となく沈んでいる。

『在宅とも、何か用だろうか。』

『十二別に、ただ少しばかり……』

『今夜宅で浪花節をやらすはずだから幸ちゃんもおいでなさいな、そらいつかの梅竜』お神さんは卒然言葉をはさんだ。

『そうですか、来ましよう、それじゃあまた晩に』と言つて幸吉は帰つてしまった。

『幸ちゃん今日はどうかしているよ』とお神さんは言ったが、先生別に返事をしないで立て膝をしながらお神さんの手元をながめていた。お神さんは時田のシャツの破綻を繕っている。

夜食が済むと座敷を取り片付けるので母屋の方は騒いでいたが、それが済むと長屋の者や近所の者がそろそろ集まつて来て、がやがやしやべるのが聞こえる。日はとつぷり暮れたが月はまだ登らない、時田は燈火も点けないで片足を敷居の上に延ばし、柱に倚りかかりながら、茫然外面をながめている。

『先生！』梅ちゃんの声らしい、時田は黙つて返事をしない。『オヤいなのだよ』と去

つてしまった、それから五分も経ったか、その間身動きもしないで東の森をながめていたが、月の光がちらちらともれて来たのを見て、彼は悠然立って着衣の前を丁寧に合わせて、床に放棄つてあつた鳥打ち帽を取るや、すたこらと梯子段を下りた。

生垣を回ると突然に出つくわしたのがお梅である。お梅はきやんな声で

『知らないよ。いいジャアないかあたしがだれのうわさをしようがお前さんの関った事ジヤアないよ、ねエ先生!』

時田は驚いて木の下闇を見ると、一人の男が立っていたが、ツイと長屋の裏の方へ消えてしまった。

『だれ。』時田は訊ねた。

『源公の野郎、ほんとにこの節は生意気になったよ。先生散歩?』お梅は時田のそばに寄つて顔をのぞくようにして見た。

『あの幸ちゃんが出来たら散歩に行つたつて、そしてすぐ帰るからッて言っておくれ、』と時田は門を出た。お梅は後について来て、

『すぐお帰んなさいナもう梅竜が出来ましたから。あらお月さま!』お梅は立ち止まった。時田は橋を渡つて野の方へと行つてしまった。

二時間も経つたろうか、時田の帰って来たのは。月影にすかして見ると橋の上立っているのはお梅である。

『先生どこを歩いていました今まで、幸ちゃんがさつきから待っていますよ。』

『梅ちゃんここで何してたの。』

『先生を待っていました、幸ちゃんの用ツて何でしょう。』

『何だか知らない。何だつてよいジャあないか。』

『だつて何だか沈鬱ふさいでいるようだから……もしかと思つて。』

『ああ少し寒くなつて来た。』

二人は連れだつて中二階の前まで来たが、母屋おもやでは浪花節なにわぶしの二切りふたきめで、大夫たゆうの声を
するばかり、みんな耳を澄すましていると見えて肅然しんとしている。

『幸ちゃんに今帰ったからツて、そ言つておくれ、』と時田は庭の耳門くぐりへ入はいつた、お梅は
ばたばたと母屋おもやの方へ駆かけ出して土間へそつと入ると、幸吉が土間の入口に立っている。

『帰つて？』幸吉は低い声で言つた。

『今帰つてよ、用が済んだらまたお寄んなさいナ。』お梅の声もささやくよう。

『ありがとう。』幸吉は急いで中二階の方へ行つた、しかし頭を垂たれたまま。お梅は座敷

の隅すみの方の薄暗い所に蹲つくなん居で浪花節を聞いていたが、みんなが笑う時でも笑顔えがお一つしなかつた。二切りめが済むと座敷はにわかになりにぎやかになって、煙草たばこを吸うやら便所に立つやら大騒ぎ。

『お梅。』母親おふくろがきよきよと見回すと、

『なに。』お梅は大きな声で返事をした。

『どこにいたのさつきから。』

『ここで聴きいていたのよ、そして頭が痛くって……』と顔をしかめて頭をこつこつと軽くたたく。

『奥へ行つて、寝やすみな、寝てたツて聞こえるよ。』母親おふくろは心配そうに言う。それでもお梅は返事をしないでそのまま蹲つくなん居でいた。そのうち三切りめが初まるとお梅はしばらく聴いていたが、ソツと立つて土間へ下りると母親おふくろが見つけて、低い声で、

『奥でお寝やすみな。』半ばしかるように言った。お梅は泣き出しそうな顔をして頭を振つて外面そとへ出た。月は冴さえに冴え、まるで秋かとも思われるよう。庭木の影がはつきりと地に印いんしている。足を爪つまだ立てるようにして中二階の前の生垣いけがきのそばまで来て、垣根越ごしに上を見あげた。二階はしんとしている。この時母屋おもやでドツと笑い声がした。お梅はいま

しそうに舌うちをして、ほんとにいつまでやってるんだろうとつぶやきながら道へ出た。橋の上で話し声が聞こえるようだから、もしかと思つて来ると先生一人、欄干に倚よつかかツて空を仰いでいた。

『オヤお一人？』

『あア。』 気のない返事。

『幸ちゃん帰りしましたの？』 お梅も欄干に倚よつて時田の顔をじつと見ている。

『今帰つたよ、』 と大あくびをして『梅ちゃんどうして浪花節聴かないの、僕一つ聴いて来ようか。』

『およしなさいよつまらない！ あたし聴いてたけど頭が痛くなって逃げ出したの。』

二人はしばし黙っていた。水車へ水を取るの橋から少し下流に井堰いせきがある、そのため水がよんで細長い池のようになっていて、その岸は雑木ぞうきが茂つて水の上に差し出ているのが暗い影を映しまた月の光が落ちているところは鏡のよう。たぶん羽虫はむしが飛ぶのであるう折り折り小さな波紋が消えてはまた現われている、お梅はじつと水を見ていたが、ついに

『幸ちゃんの話は何でした。』

『神田の叔父の方へしばらく往^いつていたいがどうしたもんだらうと相談に來たのサ。』

『先生何と言つてやりました。』お梅は時田の顔を見て言つたがその声は少し震えていた、しかし時田はそんなことには気がつかないかして、すこぶる平気で、

『なるべくは家^{うち}にいた方がよからう、そうしないとなおの事^{おふくろ}継母との間がむずかしくなるからツて、留めてやつた、かあいそうに泣いていたよ。』

『泣いて？ まアかあいそうに。』お梅は涙ぐんで黙つてしまつた。それも時田には気が付かない、

『なんでも詳しい事は聞かんだが、今度の継母^{おふくろ}に娘があつてそれが海軍少将とかに奉公している、そいつを幸ちやんの嫁にしたいと思つているらしい、幸ちやんはそれがいやでたまらない、それを継母^{おふくろ}が感づいてつらく当たるらしい、だから幸ちやんの身になつて見るとたまらないサ。』

『そうなのよ、わたしもその事はちよつと聞いてよ、そうなのよ、だつてあんまりそれは無理だわ……』まだ何か言いそうな時、突然橋の上を通り掛かつた男、お梅の顔をのぞき込んで

『オヤ梅ちゃん、今晩は、』と意味ありげに声を掛けて行き過ぎた。橋を渡つたと思うと

ちよつと振り向いて、

『忘れていた、幸ちゃんによろしく。』

『知らないわ、お菊さんが待つてるよ。』

『ハハハハありがとう。』いううち姿が見えなくなつた。

『お菊さんて踏切の八百屋やおやの娘だろうか。』時田は訊たずねた。お梅はうなずいたぎり黙つていた。

二

この日は近ごろ珍しいいい天気であつたが、次の日は梅雨つゆ前のこととて、朝から空模様怪しく、午後はじめじめ降りだした。普通の人ならせつかくの日曜をめちやめちやにしてしまったと不平を並べるところだが、時田先生、全く無頓着むとんじやくである。机の前に端座して生徒の清書を点検したり、作文を観みたり、出席簿を調べたり、倦くたぶれた時はごろりとそこに寝ころんで天井をながめたりしている。

午後二時、この降るのに訪たずねて来て、中二階の三段目から『時田！』と首を出したのは

江藤えとうという画家えかきである、時田よりは四つ五つ年下の、これもどこか変物へんぶつらしい顔つき、語調ものいと体度みのこなしとが時田よりも快活らしいばかり、共に青山御家人あおやまごけにんの息子むすこで小供の時から親の代からの朋輩ほうばい同士である。

時田は朱筆しゆふでを投げやって仰向けになりながら、

『君先せんだつて頼んで置いたのはできたかね。』

江藤は火鉢ひばちのそばに座すわつて勝手に茶を飲み、とぼけた顔をして、

『なんだツたかしら。』

『そら手本サ。』

『すっかり忘れていた、失敬失敬、それよりか君に見せたい物があるのだ、』と風呂敷風呂しきに包んでその下をまた新聞紙で包んである、画板がはんを取り出して、時田に渡した。時田は黙つて見ていたが、

『どこか見たような所だね、うまくできている。』

『そら、あの森のところサ御料地の、あそこから向こうの畑と林とを見たところサ。』

『なるほどそうだ、』といいながら時田は壁に下げてある小さな水彩画と見比べている。

『無論この方がまづいサ。ところがこの絵にはおもしろい話があるからそれで持つて来た

がこれからまたこれを持って行くところがあるのだ。』

時田は起ち上がって火鉢のそばへ来て、『ふうん』とはなはだ気のない返事をして聞いている、これはこの人の癖だから対手あいてはなんとも感じない。

『昨日きのうはあのいい天気だからいつものように出かけて例の森、僕はまだあそこは画かいたことがないからどうせろくなものはできまいが、一ツ試みて見ようと、いつもの細い径みちを例のごとく空想にふけりながら歩いた。実は——もう白状してもいいから言うが——実は僕近ごろ自分で自分を疑い初めて、果たしておれに美術家たるの天才があるのだろうか、果たしておれは一個の画家として成功するだろうかなんてしきりと自脈を取っていたのサ。断然この希望をなげうってしまいかとも思ったがその時思い当たったのは君の事だ。君がこうやって村立尋常小学校の校長それも最初はただの教員から初めて十何年という長い間、汲々ききゅう乎として勤めお互いの朋輩ほうばいにはもう大尉たいいになつた奴やつもいれば法学士で判事になつた奴もいるのを知らん顔でうらやましいとも思わず平気で自分の職分を守っている。もちろんこれは君の性分にもよるだろう、しかしそれはどちらでもいい、ともかく一心専念にやっっているという事が僕は君の今日成功している所以ゆえんだと信ずる、成功とも！ 教育家としてこの上の成功はないサ。父兄からは十二分の信用と尊敬とを得て何か込み入ったことは

みんな君のところへ相談に来て君の判断を仰ぐ。僕は今の教育家にこういう例はあまりな
 かるうと思う。そこで僕は思った、僕に天才があるうがなかるうが、成功しようがしな
 かるうがそんな事は今顧みるに当たらない何でもこのままで一心不乱にやればいいんだ、と
 いうふうに考えて来ると気がせいせいして来た。

昨日きのうもちようどそんな事を考えながら歩いて、つまるところがペンキの看版かんばんかきにな
 ろうがいなり稲荷いなりや八幡はちまん様の奉納絵を画えこうがかまわな。やるところまでやると決心したか
 らには、わき目もふれないなどしきりに思い続けて例の森まで行った。

どこを画えこうかと撰えらんで見たが、森その物は無論画えいたところで画えとしてはかえつてお
 もしろくないから、何でも森を斜はすに取つて西北の地平線から西へかけて低いところにもし
 やもしやと生はえてる 櫛なら林ばやしあたりまでを写して見ることに決めた。

道は随分暑かつたが森へ来て少し休むと薄暗い奥の方から冷たい風が吹いて来ていい心こ
 持こころもちになつた、青葉の影の透きとおるような光を仰いで身体からだを横に足を草の上に投げ出
 してじつと向こうを見ていると、何という静かな美しい、のびのびした景色だろう！ 僕
 は何なんもかも忘れてしばらくながめていた。

でき上がったのがこれだ。われながらお話にはならないまずサ加減、しかし僕は幾度で

もこれを画^かく、まず僕の力でこれならと思うやつができるまでは何度でも写しにくると決心してかかったのだ。ところでこのまずいやつをここまで画^かき上げるのに妙なことがあったのサ。

しきりと画いていると、実景があまりよくツて僕の手がいかにもまずいので、画いているがらまたもや変な気になって何というまずさだろう、これが画といわりようかおれはともだめなのかしらん、と思うと画くのがいやになつてもうよそうかもうよそうかと思いつながらやつていた。すると後ろの森の方でガサゴソと妙な音がした。この時サ、僕は振り向いて見ようとしたが、待て！ こんな事では到底だめだ、たといまずかろうがまずいからこそ勉強して画^かくのだ、奉納絵を画いてもいいという決心はどうした、一心不乱とはこの事だ、たとい耳のそばで狼^{おわかみ}がほえようが心を取り乱し気を散じないくらいでなければならぬのが、森の奥でちよつと音がしたつて、すぐそれに気を取られるようでするか、今度はまずくても何でもずんずん画いていると、ゴソツ、ガサツという音がだんだん近づいて来るようで気になつてならない、その音がまたすこぶる妙なので、ちよつと僕が一心に画^かいているのをつけこんで後ろから何者か、忍び足に僕をねらうように思われる。さアそう思うと振り向いて見たくツてたまらない。しかし一たん見まいと決心したからに

は意地いぢが出て振り向くのが愧はづかしく、また振り向くと向かないのとで僕の美術家たり得うるや否いなやの分かれ目のような気がして来た。

またこうも思つた、見る見ないは別問題だ、てんであんな音が耳はいに入るようでそれが気になるようでそのために気をもむようではだめなんだ。もし真にわが一心をこの画幅とこの自然とに打ち込むなら大砲の音だつて聞こえないだろうと。そこで画板にかじりつくようにして画かきはじめた。しかし何の益やくにも立たない、僕の心は七分ぶがた後ろの音に奪われているのだから。

そこでまたこうも思つた、何もそう固まるには及ばない、気になるならなるで、ちよつと見て鳥からすきつねか狐きつねか盗賊か鬼じやか蛇へびかもしくは一つ目小僧おにおにゆうじやうか大入道おにおにゆうじやうかそれを確かめて、安心して画いたがよサそうなものだ、よろしいそうだと振り向こうとしたが、残念でたまらない、もしここでおれが後ろへ振り向くならもう今日きやうかぎり画家はやめるのだゾ、よしか、それでよければ向け、もしこの森にいますとかうわさのある狂犬であつておれの後ろからいきなり頸筋くびすじへ食らいつくなら着いてもいいではないか。それで死んでもかまわない、こくなればもう意地だ！ この意地が通されなくらいなら美術家たるはおろか、何一ツしでかすものかと、今度はけんか腰になつて、人を後ろへ向かそうツて、たれが向くか、ぎ

まを見ると今から思えばおかしいがほんとにそう 独語を言いながら画き続けた。

音が近づくとつけて大きくなる、下草や小藪を踏み分ける音がもうすぐ後ろで聞こえる、僕の身体は冷水を浴びたようになって、すくんで来る、それで腋の下からは汗がだらだら流れる、何のことはない一種の拷問サ。

僕はただ夢中になって画いていたが目と手は器械的に動くのみで全身の注意は後ろに集まっていた。すると何者かが確かに僕の背なかにくつつくようにして足を止めた。そして耳のそばで呼吸の気合がする。天下何人か縮み上がらざらんやだ。君のような神経の少し遅鈍の方なら知らないこと——失敬失敬——僕はもう呼吸が塞がりそうになって、目がぐらぐらして来た。これが三十分も続いたら僕は気絶したろう。ところが間もなく、旦那はうめえなアと耳元で大声に叫んだ奴がある。

びっくりして振り向くと六十ばかりの老爺が腰を屈めて僕の肩越しにのぞき込んでいるんだ。僕はあまりのことに、何だびっくりしたじやアないかと怒鳴ってやツた。渠一向平気で、背負っていた枯れ木の大束をそこへ卸して、旦那は絵の先生かときくから先生じやアないまだ生徒なんだというとすこぶる感心したような顔つきで絵を見ていた。』

ここまで話して来て江藤は急に口をつぐんで、相手の顔をじっと見ていたが、思い出し

たように、

『そうだツけ、あの老爺おやじさんを写生するとよかつた、』と言って膝ひざを拍うつた。この近在の百姓が御料地の森へ入はいつて、枯れ枝を集めるのは、それは多分禁制であろうが、彼らは大びらでやつているのである。その事は無論時田も江藤も知っていたので、江藤もよく考えたら森の奥のガサガサする音は必ずそれと気の付くはずなんだ。

『それはそうとして君、それから僕は内心はすすこぶる慙はすかしく思つたから、今度は大いに熱心になつて画かきだしたが、ほぼできたから巻煙草まきたばこを出して吸い初めたら、それまで老爺さん黙もくつて見ていたが、何と思つたか、まじめな顔で、その絵をくれないかと言いだした。その言い草がおもしろいじやアないか、こういうんだ、今度代々木よよぎの八幡宮はちまんぐうが改築になつたからそれへ奉納したいというんだ。それから老爺おやじしきりと八幡の新築の立派なことなにかしやべつてゐるから、僕は聴ききながら考えた、この画はともかくもわがためには紀念すべきものである、そして、この老爺おやじもわがためには紀念すべき人である、だからこの画をこの老爺おやじにくれてやつて八幡に奉納さすれば、われにもしこの後また退転の念が生じたとき、その八幡に行つてこの画を見て今日のことを思い出せば、なるほどそうだとまた猛進の精神を喚起さすだろう。そうだとこう考えて老爺おやじにくれてやることにした。老爺大變

よろこんですぐ持つて帰るといふから、それは困る明日まで待つてくれる今日は自宅へ持つて帰つて少しは手を入れたいからと言つと、そんならちよつとわしが宅へ寄つてくれるじきそこだからつて、僕が行くとも言わないに先に立つてずんずんゆくから、僕もおもしろ半分についていつたサ。思つたより大きな家で庭に麦が積んであつて、婆さんと若夫婦らしいのがしきりに抜いでいたが、それからみんな集まつて絵を見るやら茶を出すやら大騒ぎを初めた。それで僕は明日自分で持つて来てやると約束して来たんだ。今日は降るから閉口したが待つていると氣の毒だから、これから行つて来ようと思う。』

時田はほとんど一口も入れないで黙つて聴いていたが、江藤がやつとやめたので、

『その百姓家に娘はいなかつたか、』と真顔で問うた。

『アアいたいた八歳ばかりの。』何心なく江藤は答える。

『そいつは惜しかった十六、七で別品でモデルになりそうだと来ると小説だつたツけ、』
と言つて『ウフフフ』と笑つた。この先生に不似合いなことを時々言つてそうして自分
こんなふうな笑いかたをするのがこの人の癖の一つである。

『そううまくは行かないサ、ハハハハ、イヤそんなら行つて来ようか、ご苦勞な話だ、』
と江藤が立ち上がろうとする時、生垣の外で、

『昨夜ゆうべまたやったよ、聞いたかねもう。今度は三十ばかりの野郎よ、野郎じゃアねツからお話になんねエ、十七、八の新造しんぞと来きなきやア、そうよそろそろ暑くなるから逆のぼ上のぼせるかもしんねエ。』と大きな声で言うのは『踏切やの八百屋おや』である。

『そうよ懐ふところが寒ふくなると血がみんな頭へ上あつて、それで気が狂ちがうんだらうよ』と言つたのは長屋の者らしい。

『うまいことをいつてらア』と江藤はつぶやいた。

『おいらは毎晩逆のぼ上のぼせる薬を四合瓶びんへ一本ずつ升屋ますやから買って飲むが一向鉄道往おうじよう生せいをやらかす気にならねエハハハハ』

『薬くすりが足りないのだらうよ、今夜あたりお神さんにそう言いつて二合も増ふやしておもらいな』

『違ちがえねえ、懐ふところが寒ふくならアヒヒヒヒ』と妙な声で笑つた。

三

その夜八時過ぎでもあろうか、雨はしとしと降ふっている、踏切やの八百屋おやでは早く店をし

まい、主人は長火鉢の前で大あぐらをかいて、いつもの四合の薬をぐびりぐびり飲っている、女房はその手つきを見ている、娘のお菊はそばで針仕事をしながら時々頭を上げて店の戸の方を見る。

『なるほど四合では足りねエ。』

『何がなるほどだよ。』女房はもう不平らしい。

『逆上の薬が足りないってことよ。』

『ばか言つてらア。』女房には何のことだかわからない。

『お菊、もう二合取つて来てくんねエ。』

『およしよ嘘だよ、ばかばかしい。』女房はしかるように言つて、爛徳利をちよつと取つて見て、『まだあるくせに。』

『あつてもいいよ、二合取つて来てくんねエ。明日口がきけねえから。』

『だれにさ、だれに口がきけねえんだよ。ばかばかしい。』

『なるほどまいことを言うじやアないか、今日おいらが蔦屋へ行つて今朝の一件を話すと、長屋の者が、懐が寒くなるから頭へ逆上せるだツて言やアがる。うまいことを言うじやアないか。そいでおいらア四合ずつ毎晩逆上薬を飲むが鉄道往生する気になんねえツ

て言つたら、お神さんにそう言つてもう二合も買つてもらえッてやアがる。』

『大きにお世話だッて言つてやればいいに。』と女房は言つて見たが、笑わざるを得なかつた、娘も笑つた。

『だから二合取つて来てくんねえッてんだ。』

『ほんとに今夜はおよしよ、道が悪くつてお菊がかあいそうだから。』女房は優しく言つた。

『いいよわたし行つて来ても。』娘は針を置いた。

主人は最後の酒杯さかずきをじつと見ていたが、その目はとろんこになつて、身体からだがふらふらしている。

『やっぱり四合かな。』

三人とも暫時無言。外面そとはしんとして雨の音さえよくは聞こえぬ。

『お前さん葉きが利きいたじやアないか。』

『ハハハハハ』主人あるじは快く笑つて『しかしおいらアいくら逆上のぼせても鉄道往生はご免だ。ドラ床とこの中で朝あさまで安楽成あんらくじょうぶつ仏ぶつとしようかな。今朝けさの野郎やろうなんかまだ浮かばれねエでレールの上を迷つてるだろうよ。』

『チョツ薄気味の悪イ！　ねエもうこんなところは引つ越してしまいたいねエ。』女房は心細そうに言った。

『ばか言つてらア、死ぬる奴は勝手に死ぬるんだ、こつちの為じやアねエ。踏切の八百屋で顔が売れてるのを引つ越してどこへ行くんだイ。死にたい奴はこの踏切で遠慮なしにやってくれるがいいや、方々へ触れまわしてやらア、こつちの商売道具だ。』

あくまで太い事をいって、立ち上がって便所へ行きながら、『その代わり便所の窓から念仏の一つも唱えてやらア。』

『あれだもの』女房は苦い顔をして娘と顔を見合した。娘はすこぶるまじめで黙っている。主人あるじは便所の窓を明けたが、外面そとは雨でも月があるから薄うす光あかりでそこらが朧おぼろに見える。窓の下はすぐ鉄道線路である。この時傘かさをさしたる一人ひとりの男、線路のそばに立っていたのが主人あるじの窓をあけたので、ソツと避よけて家の壁に身を寄せた。それを主人はちらと見て、『何を言つても命あつての物種ものだねだ、』と大きな声で独ひとりごと言ことを初めた、『どうせ自分から死ぬるてエなアよくよくだろうが死んじまえば命がねえからなア。』

この時クスリと一声、笑いを押し殺すような氣勢けはいがしたが、主人あるじはそれには気が付かない。

『命せえあればまたどんな事でもできらア。銭がねえならかせぐのよ、情人いろうが不実ふじつなら別な情人いろうをみつけるのよ。命がなくなりやア種なしだ。』

娘が来て、

『何言ってるの?』気味わるそうに言う。

『命あつての物種だて工事よ、そうじゃアねえか、まアまア今夜なんか死神しにがみに取っ付かれそうな晩だから、早く帰ってよく気を落ち着けて考えるんだなア。』

『何言ってるの。』

『まア出直した方がいねエ、どうせ死ぬなら月でもいい晩の方がまだしやれてらア。』

『いやな、』と娘は言つて座敷の方へどたばたと逃げ出してしまった。

『出直した、出直した。その方がいい、あばよ、』と言つて主人あるじはよろめきながら出て来たが、火鉢の横にころりと寝たかと思うとすぐ大いびきをかいている。

『ほんとにこんなとこア早く越わかくろしてしまいたいねえ、薄気味の悪い。しまいにはろくなことはないよ、ねえお菊。』母わかくろ親はやはり針仕事を始めながら、それも朝が早いからもうそろそろ眠いそうな目つきでいう。

『そうねえ。』娘はさほどにも思わぬよう。

『この月になつてからでも今朝けさのが三人目だよ、よくよくこの踏切はけちがついていてと見える。』

娘は黙つて相手にならない。二人は無言で仕事をしていたが、母の手は折り折りやんで、その度たびごとにこくりこくりと居眠りをしている。娘はこのさまを見て見ないふりをしてしたが、しばらくしてソツと起き上がつて土間を下りた。表の戸は二寸ばかり細目に開けてあるのを、音のせぬように開けて、身体からだを半分出して四辺あたりを見まわすようであつたが、ツと外に出た。軒下に立つているのが昨夜お梅ゆうべから『お菊さんによろしく』と冷やかされた男。

『オヤ磯いそさん？ なぜそんなところに立つてるの、お入りはいな、』と娘は小声でいう。

『入りはいそこねて変だから今夜はよそうよ、さつき親父とつさんが出直せつて言つたから、』とにやにや笑いながら言う。

『アラお前さんだったの？ 何だか妙なことを言つてたと思つたよ。まアお入りな、かまわないから。』

『出直そうよ、ぐずぐずしてるとまた鉄道往生と間違えられるから、』と行きかける、

『人をばかばかしい、』と娘はまだ何か言いかけると内から母親おふくろがあくび声で、

『お菊もう寝るから外をお閉め。』

『何だか雲ぎれがして晴れそうだよ、』と嘘うそを言つてだまかす。

『オヤ外にいたの、何してるんだねえ、早くお閉めよ、』と険けん貪どんに言う。

『星が見えるよ、』と言つて娘は肩をすぼめて、男の顔を見てにっこり笑う。

『早くお入りよ、』と言つて男は踏切の方へすたこら行つてしまつたが、たちまち姿が見えなくなつた。娘は軒の外へ首を出して、今度はほんとに空を仰いで見たが、晴れそうにもない。霧のような雨がひやひやと襟えりくび頸くびに入るので、舌打ちして『星どころか』と微かすかに言つたが、荒々しく戸を閉めたと思うと間もなく家の内ひっそりとなつてしまつた。

(明治三十三年七月作)

青空文庫情報

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年2月15日第1刷発行

1972（昭和47）年8月16日第37刷改版発行

1983（昭和58）年4月10日第47刷発行

底本の親本：「武蔵野」民友社

1901（明治34）年3月発行

初出：「太陽」

1900（明治33）年10月発行

入力：h.saikawa

校正：noriko saito

2004年9月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

郊外

国木田独歩

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>